

Q2：見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動が重視されていますが、実際の授業の中でどのようなことに留意して指導すればよいですか。

はじめに

「見通し・振り返り」
の意義

- ・学習意欲の向上
- ・学習内容の確実な定着
- ・思考力・判断力・表現力等の育成



確かな学力

授業での位置付け

(1)「見通し」について



ポイント①

子どもたちとめあてを共有し、子どもたちがめあてを自分のものとして自覚できるようにしましょう。

現行の学習指導要領には、小・中学校とも、第1章総則の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として新たに、「各教科等の指導に当たっては、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫すること」が示されています。

「見通し・振り返り」が重視されている背景については、教育基本法第6条第2項に「(前略)自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行わなければならない」、学校教育法第30条第2項に「主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」が追記され、子どもたちの学習意欲の向上を重視するようになったことが挙げられます。

また、学習意欲の向上と併せて、学習内容の確実な定着や思考力・判断力・表現力等の育成の観点からも、「見通し・振り返り」の学習活動は有効であり、意義あるものと考えられています。

ここでは、授業において「見通し・振り返り」を、どのように位置付けていくのか、その具体策について説明します。

「見通し」の意味は、「目標を理解すること」「めあて(課題)を設定すること」「予想や仮説を立てること」「課題解決に向けた解決法を考えること」「(時間配分や準備物等を含め)学習計画を立てること」「単元のはじめに行うオリエンテーション」など、各教科等の特質によりいろいろ考えられます。

全国学力・学習状況調査の質問紙調査において、「授業の冒頭でめあて(課題)を児童生徒に示す活動を計画的に取り入れているか」という設問に対して、教師も子どもたちも肯定的に回答している学校の平均正答率が高い傾向が見られました。一方で、教師が肯定的に回答してもそのように受け取っていない子どもたちが一定割合存在し、意識の差が見られる学校もあることが明らかになっています。そのような差を生まないために、教師と子どもたちがめあてを共有し、子どもたちがめあてを自分のものとして自覚することが大切です。

ここでは、子どもたちの自覚をより促すために、「めあて(課題)をどのように設定していくか」について考えていくことにします。

めあて(課題)を設定する際、これは子ども側の視点に立った目標であり、1単位時間で何ができるようになればよいのか、何が分かればよいのかがはっきり分かる具体的な表現でなければなりません。

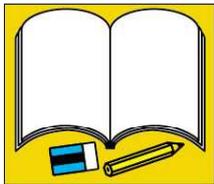
そのためには、次のようなことに留意しましょう。

- ・その授業における学習のねらいに即したものであること
- ・子どもの実態に応じたレベルと表現であること
- ・学習意欲を刺激する魅力的なものであること
- ・具体的な問いかけであり、ゴールまで見通せること
- ・子どもの望まれる姿(評価規準)が見えること

めあて(課題)を設定する際は、教師が一方向的にめあて(課題)を書くのではなくて、教材文や前時の学習の振り返りを生かして、子どもたちの言葉や考

ポイント②
めあて（課題）を設定する際は、子どもたちの言葉や考えを引き出しながら設定しましょう。

(2) 「振り返り」について



ポイント
めあて（課題）を意識した振り返りとなるようにしましょう。文章による振り返り以外にも「適用問題」「チャレンジ問題」などを用いた振り返りの方法もあります。

おわりに

【参考資料】

- ・「初等教育資料4月号」
（文部科学省 2014）
- ・「秋田県式『授業の達人』
10の心得」（小学館）

えを引き出しながら設定することが基本となります。

ただし、授業時間は45（50）分と限られていますので、めあて（課題）の設定だけに長い時間をかけるわけにはいきません。そのため、全て子どもたちの言葉でつくる必要はなく、子どもたちから出たキーワードや考え方を拾って、教師が整理する方法もあります。

めあて（課題）の設定は、はじめはうまくいかないかもしれませんが、こうしたことを積み重ねることによって、低学年では難しかっためあて（課題）づくりも、自然と子どもたちだけでできるようになってきます。

子どもたちがめあて（課題）をしっかり設定することができれば、より意欲的に学習に取り組むこともできますし、その後の話し合い活動などでズレが起きてしまっても「今日のめあて（課題）は何だったかな？」と思考を引き戻すことができます。

授業の最後に、その時間の学習によってどのような変容（知識、情意の両面において）があったのか、自己の学びの振り返りを行うことも大切です。

ここで重要なのは、「何のための振り返りか？」ということです。振り返りの意義は、子どもたちが、学習の達成感を感じたり、学んだ内容の再確認をしたり、次時につながる学習意欲をもったりすることにあるので、「めあて（課題）を意識した振り返り」をさせることが大切です。

振り返りでは、ノートに文章等でまとめることが多いと思いますが、自分の考えを文章でまとめる際は、子どもにとっては視点がないと書きにくいものです。「この学習をして何が分かったのか、何ができたのか」などと視点を明確にする必要があります。また、分かったことばかりでなく、「分からなかったこと、できなかったこと」なども書かせ、これらを教師が次の授業に生かすことで子どもたちの学習意欲の向上につながります。さらに、自己評価カードや相互評価カードの活用も有効です。

また、文章以外での振り返りの方法として、例えば算数・数学なら、学習を通してまとめたことを使ってきちんと問題が解けるかどうかの「適用問題」や、個に応じた「チャレンジ問題」を用意することも、学習意欲を育てる上で有効なものとなります。

いずれにしても、学びの達成感や変容・成長の自覚、さらなる課題意識などを子どもたち自身もつことができるような工夫が必要となります。なお、子どもたちの振り返りについては、教師が確認をして、自分の指導を振り返るとともに、次時以降への指導へつなげるということはいままでもないことです。

各学校にとって、「見通し・振り返り」の学習活動は、日々の授業展開の中で「当たり前」のことで捉えられているかもしれません。しかし、その「当たり前」のことが、子どもたちとの間で共有できているか、また、学習意欲の向上、学習内容の確実な定着、思考力・判断力・表現力等の育成につながるものとなっているか、実際の授業展開等を検証し、授業改善に心掛けましょう。

また、今回は主に単位時間について述べましたが、単元を通した「見通し・振り返り」の視点や、子どもたちが家庭において学習の見通しを立てて「予習」をしたり、学習した内容を振り返って「復習」したりする習慣を確立することなどの視点でも取り組んでください。